

# 京まち工房



SPRING  
情報交流誌

no.

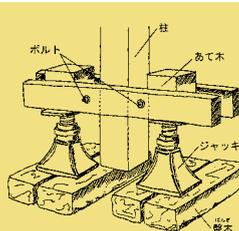
# 14

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

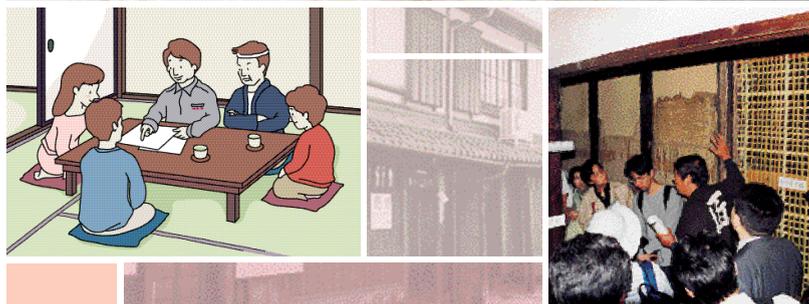
パートナーシップで進めるまちづくり

## 『よしやまの町家』

～大工さんによる京町家改修モデル住宅竣工～



家の傾き等は柱を持ち上げて直せます。



これまで、工事中の見学会等に延べ千名を超える方々が来場されるなど、高い関心を集めてきた京町家改修のモデル住宅が昨年12月に竣工し、「よしやまの町家」と命名されました。

近年、飲食・物販店やギャラリー、アトリエ・工房など華やかな再生に注目が集まる京町家ですが、本来の姿である暮らしの場としての再生は十分ではありませんでした。

そこで、大工の組合である京都府建築工業協同組合は、住まいとしての京町家の再生を進めていくことと伝統的な木造建築技術者の育成を目的として「よしやまの町家」を再生することにしました。

国や京都市による資金助成だけでなく、京町家の居住者や市民団体の方々、学識経験者、企業、さらには大工や左官など多くの方々の意見や知恵、労力が結集され、京町家の良さを残しながら快適に暮らせる現代の住まいとして再生されました。

そして、単に再生するだけでなく、工事期間中に見学会等を開催して多くの関心を喚起したり、企画段階で進められた知恵を「京町家改修の手引き」として取りまとめるなど、多くの成果を得ることができました。この成果は関係者によるパートナーシップの賜物であり、センターもその一員として取組に関わらせていただきました。

今後、自由に見学いただくと同時に、市民の方々のお知恵を拝借しながら、セミナーの開催などの様々な京町家改修に関するイベント会場として広く開放していくことを検討されており、京町家再生の拠点となることが期待されます。

また、京町家の再生だけでなく、通常の住まいの増改築や建替えを検討している方にとっても、住まいのあり方等について貴重な示唆を得ることができるため、多くの市民の方々にも一見の価値のある施設となっています。

所在地: 上京区葎屋町通下立売下丸屋町  
4月以降オープン予定となっています。  
お問い合わせは TEL : 075-802-1283 まで

### モデル京町家改修の基本的な考え方

- ・ 柱、壁の位置は極力変更しない  
(次の改修を視野に入れ、家の長持ちを図る)
- ・ 基本的な間取りは変更しない  
(多様な使い方ができる京町家の継承を図る)
- ・ 一般的な新築工事の50-70%の改修工事費を想定する
- ・ 耐震性能を高めるための工夫をする

## あなたのまちづくり拝見

# 本能まちづくり委員会

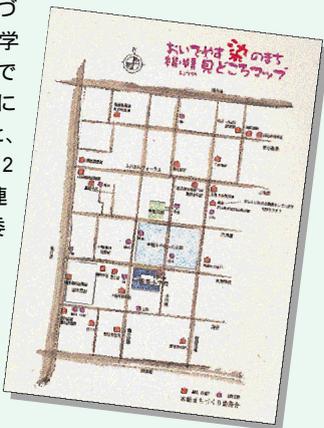
住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するこのコーナー。

今回は、染色産業という地場産業で培われたコミュニティを活かし、新たな職住共存のまちを目指して活動している「本能まちづくり委員会」の取組を紹介します。

### 「本能まちづくり委員会」の設立

四条堀川の北東に広がる本能学区は、堀川の水を活かし発展した染色産業が盛んなまちであり、また、織田信長が討ち死にした当時の本能寺があった場所でもあります。近年、染色産業の衰退とともに、人口が減少し、平成2年には本能小学校が他の4つの小学校と統合されましたが、最近ではマンション建設に伴う人口増が顕著であり、この数ヶ月の内には、約1300世帯のうち半数がマンション居住世帯になる状況にあります。

こうした産業の低迷やマンション、駐車場の増加などによるまちやコミュニティの変化に前向きに向かい合い、平成11年9月から有志の方が何度も話し合いを重ねてきました。そして、地域の資源を活かしながら、住み続けられる活力あるまちづくりに向け、学区民みんなでまちづくりに取り組もうと、平成11年12月に、自治連合会の常設委員会として「本能まちづくり委員会」が設立されました。



### 本能を愛する人なら誰でも参加

この委員会の特徴は、自治連合会(町内会)に加入されていない人も受け入れている点にあります。本能学区の居住者、事業者、就業者、土地所有者だけでなく、学区外の方でも参加で



本能のまち歩きのために撮影した写真をもとに意見交換

きるようになっており、学区外に事務所を移された事業者や、本能学区に興味を持つ学生などもメンバーの一員として参加しています。また、古くからこの地域に住む人だけでなく、退職後の活動の場を地域に求めようとしている、あるいは、本能に愛着を持って住み続けたいというマンション居住者等もメンバーとして参加し、委員会は20代から70代の約30名で構成されています。

### みんなでまちを再認識するところから

「『染めのまち』ということ言い過ぎない。まちづくり活動は業界振興を目的にしてはいけない。染色産業にこだわるのではなく、取組を進める中で染に関わらない人も含めて、地域資源の一つとして『染め』が認識されれば」との思いを共有し、取組を始めました。設立当初は、月に一度の定例委員会に加え、自分たちのまちがどんなまちなのか再認識、再発見するためのまち歩きや歴史を学ぶ勉強会を開催してきました。同時に、先進事例見学・交流会による研修活動や、2ヶ月に一度の広報紙「本能まちづくりニュース」の発行によるまちづくり委員会活動の周知活動も行っています。

また、昨年4月、現在の本能のまちの姿を記録することを目的とした本能まちなみ姿図の作成や、本能らしいまちなみの研究活動等を行う「まちなみ部会」と、「交流促進部会」の2つの部会に分かれ、益々活動も活発化しています。地域のふれあいイベントとして開催されている体育振興会主催の夏まつりへの参加を手始めに、本能学区に新しく移り住んだ人向けの本能便利マップや自治連合会各種団体の活動を紹介した手づくりパンフレットの作成等にも取り組んできました。

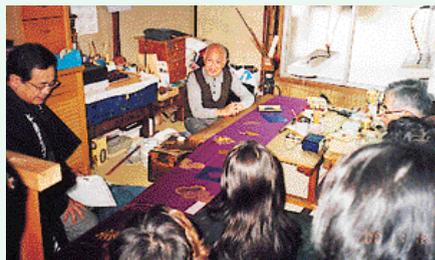
染色関係に関わるお仕事をしている世帯数の調査も行いました。かつて全世帯の8割が染色関連であったことから比べると減少したものの、現在でも約200世帯もの方々が従事されていることが確認され、産業によって培われたコミュニティやまちの姿などを再認識しました。



夏まつりのまちづくり委員会コーナーのまちなみクイズを考える子供たち

### 「おいでやす 染めのまち 本能」

様々な活動を踏まえ、学区民の共通の思いとして「染めのまち」が広がってきたことを受け、平成12年11月、イベント「おいでやす 染めのまち 本能」が開催されました。学区にはどれだけの染色関連の業種があるのか、具体的にどんな仕事をされているのかということも多くの人と共有することが目的でした。



「おいでやす 染めのまち 本能」まち歩きツアーによる公開工房の見学

元本能小学校を使っの技の実演・工程紹介、江戸時代の着物の展示、各家々での公開工房等、本能学区だけでなく、周辺学区の協力も得て開催されました。このイベントを通じ、より多くの人との交流が進み、まちづくりの理解者を増やしたことは間違いありません。

まちづくり委員会の研修で訪れた大阪平野郷の松村長二郎氏も駆けつけ、後日、本能ニュースに投稿されました。「見る人も見せる人も双方が楽しんで。義理や厄介でないのが伝わってくる。私共が提唱する“当人が一番先に楽しまなまきまへんでー”これが実行されていた。ほんまにようやはった。ケチのつけようがない。仲間の輪が広がって実にうれしい。義務でやるのではなく、委員自らが楽しむことが、より多くの人を集めることに繋がります。各々の得意分野を上手く引き出し、役割を分担し進めている力こそが大切であることが実感されました。

設立されてわずか1年余り。本能のまちづくりで行われていることが、新たな職住共存地区のあり方を考えさせてくれる活動であることは言うまでもありません。個人の得意分野を生かし、より多くの人と共有していくまちづくりが、今後も発展し、また、広がりをみせることが大いに期待されます。

### 本能自治連合会会長 安西圭之助さん

平成9年10月にまちづくりに関して初めて会合を持った頃、和装産業のピンチの波はまだ本能まで浸透せず、平成11年頃になってまちの移り変わりの激しさに愕然と目を覚ました次第です。そして、その頃にまちづくり委員会の設立。伝統産業の街。歴史の街。様々な資源を持つこの本能のまちを、今一度見直し、古くの賑やかさを取り戻したいものです。



### 本能まちづくり委員会委員長 西嶋直和さん

現在の急速なまちの変化に対応していくため、自らが自らのまちのことを考えていく、まさにその時ではないでしょうか。まちづくりの基本は、「住みたい、育てたい、仕事をしたいまち」であることではないでしょうか。そのためには、今一度本能のまちを見つめ直し、新たな資源を見つけ出し、魅力あるまちにしていこうと思っております。



お知恵拝借~

「南信州 高森町のまちづくり」

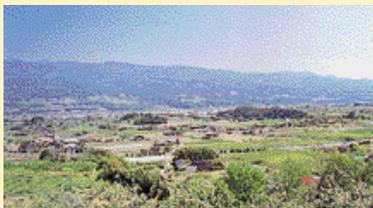
今回は、長野県の南部に位置し、全国でもいち早く住民参加のまちづくりを実践されていることでも有名な、高森町のまちづくりからお知恵を拝借します。

中央、南アルプスに囲まれた段丘の町「高森」

高森町は、長野県の南部、中央アルプスと南アルプスに囲まれた下伊那郡の北部に位置する天竜川西岸に広がる人口約1万2千人の段丘の町です。アルプスの上昇による断層と川の浸食による扇状地の形成の繰り返しにより、西にそびえる高森山から東に向かって緩やかに、大きく上段・中段・下段と分かれた階段状の特有の地形を形成しています。

また、こうした豊かな自然の恵を受け、リンゴや梨を中心とする果樹栽培が盛んであるとともに、秋になると家々の軒先に吊るされた柿すだれは「市田柿」の発祥の地として知られる高森町の秋の風物詩となっています。

平成11年には、それまで日本最古の貨幣と言われていた「和同開珎」より古いとされる貨幣「富本銭」が出土したことでも有名です。



高森町の風景

「高森町」における住民参加のまちづくり

こうした自然に囲まれた高森町で、「まちづくりは町民全てが自主的に考え、役場全職員力を結集することが必要であり、計画策定においても町民に関わってもらい生きた計画にしたい。そのため職員には、地域の伝統や歴史、文化、自然に常に目を向け、それらを活かすために知恵を絞り、体を張り住民に愛されるふるさとづくりに邁進することが求められる」という吉川町長の考えのもと、住民参加のまちづくりとして次のような取組が始められました。

また、こうした事業を推進するにあたり、高森町では地区担当制という仕組みを取り入れました。これは全ての職員が、職種や人事異動等に影響されず同一の地区を継続して受け持ち、地区計画策定や婦人ふるさとづくり事業の窓口となり支援を行うというもので、職員が地

域と行政とのパイプ役を担っています。

こうした先駆的な取組が評価され、平成9年度には「潤いと活力のあるまちづくり優良地方公共団体自治大臣表彰」を受賞しました。

「地区計画策定推進事業( )」

昭和63年から、住民参加のまちづくり基盤にしようと、住民が主体となって地域のまちづくりの計画を策定する地区計画策定事業をスタートしました。これは、町内を21地区に分け、それぞれの地区の特色、事情に応じたまちづくり計画(計画期間5年)を独自に策定するもので、各地区毎の町内会長、団体の長などによる地区・集落計画策定委員会を中心となって進められています。

「婦人ふるさとづくり事業」

女性の地域参加の場づくりと、女性の持つ特性を地域社会に活かすことを目的に、平成元年にスタートしました。

これは、地区計画の策定過程において女性の声反映されにくい状況があり、計画内容も道路整備や施設建設などハード中心であったため、女性による住みよいまちづくりを目指した活動を支援しようとしたもので、まちの資源の再発見や先進地視察、学習会等が行われています。

住民参加・主体のまちづくり

今から10年以上も前に事業としての位置付けがなされるなど、その先駆性、独自性が伺われる高森町の住民参加・主体のまちづくりですが、近年では、地区計画策定過程が形骸化している一面があり、また、新たに転入し、既存のコミュニティに属さない独立世帯が増加するなど、新たな課題が発生しており、今後の対応が注目されることです。

こうした住民参加・主体のまちづくりは、全国各地でその取組が進められているところです。それぞれのまちを取り巻く状況は大きく異なり、必ずしも同じ方法が有効とは限りませんが、市民ひとりひとり、または各地域の特性を活かしたまちづくりを考えた時、高森町における「地区担当制」という手法は、地域毎の特性を理解し、かつ継続的なまちづくりを進めていくための非常に有効な手段ではないかと思われま



まちのたからものを集めました

都市計画法による地区計画ではなく、高森町独自の制度である。

センター設立3周年を記念して



2) 1月、京都府京都市西京区に於いて、賛助会員&まちづくりフレンズ交流会を開催しました。センターの設立3周年を機に、これまでご支援いただいた賛助会員やまちづくりフレンズ、そして評議員の皆さんが初めて一堂に会し、日頃のまちづくりの取組やセンターへの

東横口評議員による挨拶

注文など幅広く自由な意見交流を行っていただくこと開催したものです。

来賓の西京都市都市計画局長の挨拶に続き、センターの取組報告、そして東横口評議員による乾杯でスタート。特に今回は「評議員サロン」の拡大版ということもあり、評議員と参加者の活発な意見交流があらこちらで見受けられたほか、ご自身のまちづくりの取組発表やセンターに対する激励、辛口批判も頂戴しました。

なかでも、賛助会員で町家を改修されたうなぎ屋のご主人・尾関亘さんからは「町家の再生を通して活気ある京都のまちづくりを進めて欲しい」と力強いエールが。また、まちづくりフレンズで地域のマンション問題などに取り組む橋恵利子さんからは「誰に頼るものでもない、まちづくりは自分でやって初めてできるもの」という実感のこもった声をいただくなど、大変活発な交流・意見発表が続き、会は盛況のうちに幕を閉じました。ご参加いただいた皆さんには厚く御礼申し上げます。

センターでは来年度以降もこういった企画を充実し、関係の皆さんの交流を深めるとともに、皆さんの声を今後の活動に生かしていきたいと考えています。

京のまちの今昔物語

昭和20年代の四条通の新京極周辺(南側から撮影) まだ、四条通にはアーケードがありませんでした。



写真は中京区にお住まいの坂本美恵子さんからいただきました。

「京のまちの今昔物語」では皆さんがお持ちの昔の写真を切り口にして、現在の京都の問題点を再確認できたらと思います。皆さんもお宅のアルバムの古い写真を探し出してぜひ投稿してください。

## 地域まちづくりセミナー

### —東山区で開催！—

平成10年度から開始し、3年目を迎えた「地域まちづくりセミナー」。今年度は、東山区を対象に開催されました。

東山区は、鴨川と東山に挟まれた坂の多いまちで、古くからの門前町や歓楽街、比較的最近に開発された住宅地など、様々な成り立ちを持つ地域です。世界的に有名な観光資源が多く存在する地域であるとともに、陶芸をはじめとする数々の伝統産業が受け継がれている地域でもあります。その一方で、京都市の中で最も高齢化率が高く、少子高齢化への対策が急がれる状況にあります。また、全国で女性人口の占める割合が最も高い地域でもあります。

そのような東山区を対象に、全11学区中、7学区から約50名の参加を得、1月25日から5回のセミナーが開催されました。今回は、まちづくりの



学区ごとにグループに分かれて意見交換

専門家のボランティアだけでなく、一昨年の京都市自治100周年を記念する東山区の取組である学区民による防災マップづくりに参加した市職員もボランティアで参加し、学区を越えた様々な人との交流を図りながら、共に地域のまちづくりを考えました。

第1回は、既にまちづくり委員会を立ち上げて取り組みを進めている西陣学区と本能学区の方々から話題提供をいただき、第2回では、大阪の平野郷のまちづくりの視察に行き、各回、活発な意見交換を行い、まちづくりの意義や進め方について考えました。そして、第3回から第5回にかけて、まちの資源を活かしたまちづくりに向けて、どのような実践ができるのか、学区ごとに話し合い、発表し合いました。

このセミナーをきっかけに、東山区でも新たなまちづくりの取組が始まることが期待されます。

(詳しくは次号でお知らせします。)



案内ピラ

## 「まちなみ住宅」設計コンペ

～21世紀のまちなみ・住まいづくりに向けた取組～

戦後の住まいづくりは、資産としての持家の取得及び設備機器等の充実による便利な生活の実現が目的であったといっても過言ではありません。そして建売住宅もこのような考え方に基いて供給されてきました。

しかし、土地神話の崩壊、住宅性能確保に向けた国の取組、環境共生等の個々人のライフスタイルの変革と多様化などにより、住まいに対するニーズが近年大きく変わりつつあります。バリアフリーやシックハウス対策などの住宅単体の性能向上だけでなく、地域のまちなみとの調和やコミュニティとの交流など、地域の中に暮らしたいという要求です。

このような背景の中、センターは都市居住推進研究会と共催で「『まちなみ住宅』設計コンペ」を実施する運びとなりました。

本コンペは、京都市右京区太秦の一戸建の住宅開発予定地を対象に、地域資源を活かし、地域住民と協働して、地域のまちなみとコミュニティに貢献する21世紀に相応しい住宅開発のあり方を考えることを目的としています。このため、審査に至る過程で、地域住民をはじめ、住宅の取得を希望する市民、

住宅開発事業者、学識経験者などの参加する交流

会を開催して地域の相互理解を図った上で、広く公開して審査を行います。全国に例のない新しい取組が評価され、設計提案者については北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から209組の応募登録がありました。

去る2月24日、交流イベント「まちなみウォッチング」が開催されました。審査員30名及び設計提案者約260人が参加する中、3つのグループ・会場に分かれた審査員相互の意見交流、まち歩きを設計提案者を交えて行い、それぞれの立場・思いの共有が図られました。この成果を踏まえてそれぞれの思いを確認・共有する「地域交流会」を3月4日に開催し、現在、設計提案を受け付けています(3月31日〆切)。

本コンペの成果は、対象地で事業化されるだけでなく、右京区の地域資源を活かしたまちづくり、あるいは住民、事業者のパートナーシップによるまちづくりのモデルとして、広く情報を発信していくことを展望しています。



「まちなみウォッチング」の様子

### 都市居住推進研究会

「誰もが住みやすい京都のまちづくり」を目指し、現在の京都が抱える課題などを掘り起こし、有効な解決策をまとめ・提案することを目指し、平成6年5月に設立。学識経験者、民間企業等で構成され、市民フォーラムやワークショップの開催、ニュースの発行に加え、まちづくりに関する多くの提言活動を行っています。

### まちなみ住宅設計コンペ

主催 / 都市居住推進研究会  
財団法人京都市景観・まちづくりセンター  
後援 / 京都市、京都府建築士会  
日本建築家協会近畿支部京都府会  
社団法人都市住宅学会  
協賛 / 株式会社ゼロ・コーポレーション  
運営委員 / 委員長 巽 和夫(京都大学 名誉教授)  
副委員長 広原盛明(龍谷大学 教授)  
委員 乾 亨(立命館大学 教授)  
高田光雄(京都大学 助教授)  
リム ボン(立命館大学 助教授)

## 地域共生の土地利用検討会

ニュースレターでも度々報告して参りましたが、「地域共生の土地利用検討会」は、平成12年12月の第17回の検討会をもって、終了いたしました。本取組は、地権者、地域住民、そして検討地周辺をテーマに活発なまちづくり活動を展開している「姉小路界隈を考える会」等が協働で地域のまちづくりに貢献する土地利用を検討してきた、全国にも例のない取組です。2年間の取組を踏まえて、まちの街区形成と住環境に配慮した建物のボリューム、内部施設と地域との交流方法の展望、新しい住民の迎え方と交流方法の展望をまとめました。

古くより人々との交流拠点であった都心には、多様な立場の人が住み、そして多くの考え方の違い、利害関係を内包しています。検討会では、

土地利用の検討を通して、それぞれの利害の調整だけでなく、まち全体の魅力発見と共有、土地利用の構想の検討を進めてきました。

またその構想をベースにした、具体的な施設の内容に関する検討も重ね、検討会メンバーを中心に「地域の文化を発信し、交流できるようなスペースにしよう」とまちの将来像を踏まえた具体的なアイデアもだされました。

また、新しいまちづくりの担い手を育成することの必要性が出され、「顔の見える安心感」を目指し、このようなまちづくりに参加したい人、そしてこのような場所に住みたい人と共に交流の仕掛けを検討する「まちなか住まい交流会」を開催しました(前号参照)また検討会の取組は参加者がそれぞれの立場で情報発信してきました。

地域共生の土地利用検討会の取組は、決して特殊なものではありません。「まちの良さを守りた

い」「まちを良くしたい」「もっとこんなまちにしたい」という思いから始まり、まちを構成する人・ものを客観的に見つめ、共有し、そしてまちの将来像を描き、共有することを継続し、まちづくりの文脈に沿った土地利用へと結実させました。

検討会で議論してきたことは土地利用に関する方向性で、実施設計や入居者の募集等具体的な内容はこれからの検討事項であり「地域との共生」に向け、まだ第一歩を踏み出したばかりです。しかし検討会の取組を通じて醸成されたそれぞれの「思い」は、検討地をまちで共有する宝物として育んでいくことが期待されます。



建物の形も、まちと「共生」することを目指し、検討しました

# 京町家サロン

これまでにもお伝えしてきましたが、平成9年度から3年に渡って実施された京町家まちづくり調査を通して、京町家の実態やその保全・再生への課題の多くが明らかになると同時に、市民をはじめとした約600名のご参加をいただき、京町家の保全・再生に向けての支援の輪が広がりました。

京町家まちづくり調査としては一定終了しましたが、京町家保全・再生への道のりは始まったばかりです。調査終了後、ご参加いただいた市民ボランティアの方々を中心に、これまでの経験を活かし、京町家の保全・再生をともに考え、より充実した活動を展開していこうと、平成12年6月、京町家サロンがスタートしました。「まだまだ話を聞くべき京町家にお住まいの方々がいる」「今後も京町家の再生を考えていきたい」「何らかの役に立てれば」といったような声から、活動の継続を考えることになり、センターが呼びかけたものです。現在約200名のご関心のある方が集まり、建築士や大工をはじめとする専門家のみなさん、市民のみなさん、京都で学ぶ学生のみなさん、その他市内外を問わず、全国にまでその輪は広がっています。



第1回交流イベント  
「ぶらり京町家探訪」の様子

この京町家サロンでは、「みんなでつくる京町家サロン」を合言葉に、交流を図りながらひとりひとりの想いを共有し、多様な関心を集め、参加メンバーそれぞれがスタッフも兼ねながら企画を進めています。まずは情報の共有を行うおうと、情報交流紙「京町家サロン通信」を隔月で発行し、京町家サロンの取組やイベントの紹介をはじめ、京町家の保全・再生に関する様々な情報を発信しています。また、隔月でオープンサロンを開催してゆるやかな情報交流を図り、京町家見学やまちあるきなどのイベントを開催して交流と学びの機会とするなど、様々な取組を行っています。

これからは、メンバーひとりひとりが京町家サロンを通じて京町家の保全・再生を考え、それぞれの得意分野を活かしながら今後の京町家再生の担い手となるよう、また、このサロンで培われた人のつながりや経験、見識を活かし、その輪を広げていけるよう、活動を展開していきます。

## 京町家の保全・再生事例 ～家族・安心・暮らす～

平竹邸(中区車屋町通押小路下ル)

沿道に商業ビルが建ち並び烏丸御池。一筋外れて足を踏み入れると、そこは住み商う人々が暮らす等身大のまちがある。このまちの一角にある京町家。ここに平竹氏は奥さんと小学5年生を筆頭に4人の子ども、そして離れの両親と暮らす。母屋は1904年の建築、以前は呉服商の家だったと伝え聞く。昭和のはじめに祖父母が住み移り、平竹氏はここで生まれ育った。中2階の母屋とまだ新しい離れが建っている。

これまでに何度も何度も改修を繰り返してきた。トイレとお風呂は平竹氏が幼いころ新しくし、台所も小学校のころ床あげして、いわゆる東京式台所とした。1980年ごろには、地盤沈下して若干傾いていた母屋の基礎を補強し、そのときに台所もシステムキッチンに替えている。瓦も吹き替えた。1990年には傾いて取り壊されていた離れの場所に、子どもが誕生しアパートが手狭になった夫婦の新居を建てた。

傷んだところを補修しながら、暮らしにあわせて住み良いよう、何度も手を入れる。家族の成長とともに歴史を刻んできた。「代替わりのたびに新築したり、買ったりするのはもったいない。各世代で少しずつ手を入れて長く使った方が得ですよ。その方が環境や資源保護にも役立ちます。おそらく両親もそう考えてきたのでしょう。」そう話す平竹氏が、昨年の9月から3ヶ月間、母屋の2階部分を中心に改修を施した。子ども達の成長に伴い、離れの息子の世帯と、母屋の両親の世帯が入り替わるようになったのだ。一番気を付けたのは安全性。そこは思い切って直してもらった。剛性を高めるため、床に構造材を敷き詰め、梁を架け替えるなど耐震強化に努めた。同時に自分た



2階吹き抜け天井と梯子で上るロフト

ちの暮らしにあわせ、使い勝手を良くすることを心がけている。部屋の用途を決めてしまわずに、将来は間仕切りを家具で代用することも考え、フレキシブルに使えるようにしたという。納戸だった部屋だけは、個室として使えるようにした。階段も傾斜を緩やかにしている。続き間だった4部屋の真ん中2部屋を一つにし、天井をはがして吹き抜けをつくり開放的な空間にした。高い天井の天窓からは優しい光が降り注ぐ。建築士のアドバイスにより、空気を拡散させるため、天井にはファンも取り付け付けた。個人の隠れ家のスペースをと、押入れの上部にロフトを設ける。今ではやんちゃ盛りの子どものための格好の遊び場である。

自分が中高生ぐらいのときは、トイレに行くのもほとんどの部屋を通らないといけなかった町家の間取りは不便だと思っていたが、親の立場になると、いつもどこかで家族がなんとなく顔を合わせるようになっていくのがいいと思うようになったという。「本当はもっといっぱいやりたいが、今回はここまで。次の代になったらやってもらおうと思っています。」子どもの遊び姿を眺めながら平竹氏は笑顔で語る。

これらの改修は、建築士との協働作業で進めている。両親の代から同じ建築士に依頼。その時々大工を紹介してもらっている。建築士のパソコンの中には、この家のカルテとなる修繕記録が残っている。建築士が入ることにより、工事内容や費用の面で相談しながら進めることが出来るという関係が生まれたという。

「ガレージ代は現代生活における町内会費みたいなもの。」平竹氏は自宅に車庫を設けず駐車場を借りている。「そのうち表の塗装をし直さないと、と思っています。どういう家かというのは、人格をあらわしているようなもの。外観を保つのも自助努力しないと。町並みは揃っている方がきれい。町家が絶対ということはないが、町家に住んだのであれば、そのよさを活かしていきたいと思う。普通に暮らす。家族みんなが安心して、このまちに暮らす。当たり前ということが難しくなってきた。平竹氏からその姿勢を学びたい。

### 平成12年度賛助会員 (平成13年2月末現在。五十音順。)

**[個人]**

- |       |       |       |        |       |
|-------|-------|-------|--------|-------|
| 秋山 智則 | 大橋 浩  | 北里 敏明 | 寺本 健三  | 林 建志  |
| 粟津 六男 | 大森 實  | 木村 茂和 | 土井 健資  | 福留 剛  |
| 池田 敏彦 | 岡崎 篤行 | 久保 恒男 | 友廣 隆   | 福本 眞俊 |
| 石田 真希 | 岡村 虎夫 | 阪本 隆哉 | 中川 慶子  | 藤本 春治 |
| 石原 一彦 | 岡本 晋  | 佐竹 和男 | 中島 吾郎  | 平家 直美 |
| 井手 正己 | 奥 美里  | 塩谷 孝雄 | 西川久壽男  | 星川 茂一 |
| 糸井 恒夫 | 奥山 脩二 | 島崎 耕一 | 西川 壽麿  | 堀岡 博  |
| 稲石 勝之 | 尾関 亘  | 清水 武彦 | 西嶋 直和  | 正木 敦士 |
| 稲波 良幸 | 小野 幸一 | 杉山 義三 | 西田 祐司  | 松村 光洋 |
| 稲本 浩一 | 小山 選一 | 高木 勝英 | 野島 久暉  | 南 寛   |
| 犬伏 真  | 桂 豊   | 高木 伸人 | 野原 康   | 森 知史  |
| 岩本 文夫 | 河内 隆  | 武居 桂  | 橋本 清勇  | 山口 翔  |
| 上田 修三 | 川口 東嶺 | 竹林 哲  | 長谷川梅太郎 | 山本 一宏 |
| 植村 博之 | 川越 柊子 | 田中 治次 | 長谷川忠夫  | 吉田真由美 |
| 大谷 孝彦 | 川島 三郎 | 田村 佳英 | 長谷川輝夫  | 吉原 和恵 |
|       | 岸田里佳子 | 寺田 敏紀 | 服部 俊幸  | 淀野 実  |

**[団体]**

- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| アジア航測(株) 京都支店       | (株)西利             |
| 大阪ガス(株)             | (株)堀場製作所          |
| 大阪ガス(株) 京滋事業本部      | 関西電力(株) 京都支店      |
| NPO法人京滋マンション管理対策協議会 | 京セラ(株)            |
| NPO法人マンションセンター京都    | 京都駅ビル開発(株)        |
| オムロン(株)             | 京都リサーチパーク(株)      |
| (株)オーセンティック         | 清水建設(株) 京都営業所     |
| (株)大林組京都営業所         | (社)日本建築家協会近畿支部京都会 |
| (株)木津工務店            | 中央復建コンサルタンツ(株)    |
| (株)京都科学             | 都市居住推進研究会         |
| (株)京都放送(KBS京都)      | 日新建工(株)           |
| (株)ジェイアール西日本伊勢丹     | 西日本電信電話(株) 京都支店   |
| (株)ゼロ・コーポレーション      | 花豊造園(株)           |
| (株)地域計画建築研究所        | 松下電器産業(株) 公共システム  |
| (株)地域生活空間研究所        | 営業本部関西支店 京都営業所    |
|                     | ローム(株)            |

## まちづくり交流

### 「西新道錦会商店街振興組合」

- 住みやすいまちづくり、住み続けたいまちづくり -

様々な先進的な取組を行っている商店街として全国でも名高い「西新道錦会商店街」。地域に根ざし、様々なアイデアとネットワークで先行しています。今回は、この商店街による「まちづくり」の取組を紹介します。

総延長約800m。約140軒の店舗が連なる「西新道錦会商店街」は、京友禅のまちとして栄えた中京区壬生地域に位置しています。「さん元氣か」。買い物客のおばあさんに、声を掛ける店員の声からも、地域の中での役割が高いことが伺えます。時代の流れとともに、和装産業の衰退、人口の減少、高齢化の進行という変化が起こるこのまちで、地域に根ざした商店街として、様々な事業が展開されています。

#### エブロンカード事業(平成2年~)

ICカードを用い、プリペイドやポイントサービス、クレジット、銀行キャッシュカード、家計簿サービス等の機能を持たせた日本初の電子マネー。お年寄りにとっても、お金を払う手間が省け、後ろの人を待たすことなく気兼ねなく買い物ができるという利点もあり、6千人以上もの利用があります。

#### ファックスネット事業(平成9年~)

ファックスによる商品情報やコミュニティ情報の提供、商品の注文・宅配、ファックスのレンタル等を行っています。商品注文・宅配の利用者は決して多くはないものの、いざというときにはFAXで頼めるという安心感が好評です。

#### 高齢者サービスセンター事業(平成11年~)

高齢者に対する給食サービスを、週に1度行っている事業。地域の授産施設等に調理を依頼することで、施設の方と地域の方とのふれあいを図ると同時に、授産施設の収入源の一つとして活用しています。配食ではなく空き店舗を食堂に活用することで、高齢者同士や高齢者と商店主とのコミュニケーションを図ることも目的としています。

その他にも、実習を目的とした修学旅行生の受け入れや、地域住民との交流や地域住民の活動の場、活動資金確保の場として年に一度の「夏まつりワイワイサンデー」を開催するなど、日頃から地域に根ざした商店街が身近にあることにより、住みやすいまち、住み続けられるまちでありたいと考えています。

また、「地域活動を担うのは私たちのような自営業者が大半。私たち個人個人の地域での役割も大きいと感じています」という原田さん(西新道錦会商店街振興組合事務局長)の言葉にもあのように、店舗と住居が一体となった形態が多いこの商店街では、自治連合会や各種団体の役を担う人も多く、今後もこの重要性を認識した上

で、職住一体を守っていかようとしています。

こうした様々な活動は、商店街の組合員だけでなく、大学の先生や学生、企業など様々なネットワークで進められています。

昨年の12月にも、新たな取組として、「西新道ノトリ大作戦」と銘打って、本商店街をフィールドに研究した立命館大学の学生さんが成果を発表し、商店街の方々との意見交換するシンポジウムが開催されました。ここでは、思いつかなかったような学生らしい提案も数々出されました。「実現させるためには、整理する問題もたくさんあるが、第三者という学生が調査したことにより、組合員の本音を引き出すことや、若者も含めた広い視野で活動を見直すことが出来た」という、商店街側からの感想が出されました。

2月17日、18日には、全国下町商店街サミット実行委員会との共催で、「21世紀の地域商業とまちづくりを考える」と題して、都市計画から見た商店街、大店立地法との関係、地域から見た商店街、商店街から見た地域、IT、学生との関わりと、幅広い視点で議論がなされました。

「もの売る商店街から地域の暮らしを支える『地域の護民官』としての商店街を目指して今後も活動していきます」と原田さん。このように地域に密着した商店街のあり方さん、商店街の地域での役割を考えながら、様々なアイデアとネットワークで活動を進めるこの「西新道錦会商店街」の今後に、大きな期待が寄せられます。



買い物客で賑わう「西新道錦会商店街」

## まちづくり提案

### 京都パブリックカーシステム

近年、都市交通のあり方について、地球規模での環境や省資源の面や、渋滞や駐車場、交通事故等の課題解決の面から見直しが進み、新たな試みが始まっています。今回は、新しい地域交通システムの事業化を目指した実験を行っている「京都パブリックカーシステム」を紹介します。



日産のハイパーミニとトヨタのe-com

このシステムは、超小型の電気自動車を共同利用することにより、環境負荷の少ない人や地球にやさしい交通システムの実現を目指し取り組まれています。

現在、商工会議所や公共施設、商業施設、研究・集積地、観光地など市内6箇所に車両ステーションを設置し、35台を運用しています。周辺300m以内で居住または就業しているモニター会員からのパソコンまたは携帯電話での予約に応じ、4時間を限度に貸し出しを行っています。返却は予約時に指定したステーションで行います。

平成12年度から3ヵ年取り組まれています、平成13年度からは事業化を睨み、課金(利用料金の徴収)の実施と、観光客へのモニターの拡大を予定しています。

平成16年度には本格的な事業化を図り、市内各地にステーションを設け、既存の交通手段とも連携し、それぞれの効率性を高めていくことを目指しています。

この取組は、実験に取り組んでいる(株)最適化研究所社長の藤森氏を始めとする「京都市中金コース会」の仲間から広がりました。

平成7年、前職の砂糖問屋の専務として参加していた商工中金京都支店運営の異業種交流組織「京都市中金コース会」の仲間とITのビジネス化についての研究を始めました。本場を見てみようと思ったシリコンバレー。そこで目にしたものは、地域社会のため、先頭に立っている成功者達の姿であり、地域社会を支える専門家のコラボレーション(協働作業)とネットワークでした。

それをきっかけに、取組の方向は「地域社会の活性化」と「環境と経済の最適化」へと転換します。

平成9年から、通勤や買い物など活用時間も少なく、一人で乗車していることの多い平日の乗用車利用の無駄の解消や、渋滞や駐車場問題等の解決のための研究に取り組みます。

こうした活動が京都市商工会議所の取組につながったことで、弾みがつきます。平成12年には府や市と商工会議所などにより「京都パブリックカーシステム研究委員会」が発足し、京都らしい取組内容と、京都の持つブランドイメージも手伝って、

通産省(当時)からの国庫補助が得られることとなり、今回の実験にこぎつけました。

このシステムの特徴は、乗用車の「共同利用」の課題であった車両運用の効率化を、ITS(高度道路交通システム)技術が支えている点であり、「短距離移動、小型化」に適している電気自動車の特性を最大限に生かしている点にあります。最新技術を駆使したシステムですが、「事業化のため最も必要なのは、人と人のコラボレーションとネットワークであり、企業や行政、地域住民の方々の協力が何よりも大切です。」と藤森氏は話します。

「例えば、公共交通機関との乗り継ぎ割引、ステーション敷地提供事業者(商店や飲食店、企業やホテル)のイベントやお店、観光スポット等の情報の利用者への発信、ステーションの運営への地域住民の協力等が不可欠です。」京都モデルを構築し、世界中に発信し、様々な問題を解決できればと思っています。」

熱い思いを持つ仲間の輪が広がり、夢が形となる社会の実現が望まれます。

#### ITS(高度道路交通システム)

最先端の情報通信技術を用いて、人と道路と車両とを情報でネットワークすることにより、交通事故、渋滞などといった道路交通問題の解決を目的に構築する新しい交通システム。

#### 京都パブリックカーシステム

URL : <http://www.ev-kyoto.com/>  
e-mail : [staff@ev-kyoto.com](mailto:staff@ev-kyoto.com)



藤森氏

## ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

### 株式会社資産活用倶楽部 京都

代表取締役 吉田光一氏  
 スタッフ 田原陽子氏  
 スタッフ 塩野順二氏

#### 設立の経緯・背景と活動内容を教えてください。

株式会社資産活用倶楽部京都は、賃貸事業を主とする株式会社フラットエージェンシー内にある会社です。



左より塩野氏、吉田氏、田原氏

賃貸事業者は、地家主さんの大切な資産をお預かりする訳ですが、私たちは地域密着型で地家主さんとの顔の見える関係を大切にしてきたことから、相続など様々な相談を受けることが多いのです。バブル経済の崩壊以降、土地をめぐる環境が大きく変化し、地家主さんは資産に関して相談したいことが沢山あっても誰に相談したらいいのかわかりません。そこで、私たちが長年築き上げてきた地家主さんとの信頼関係と、司法書士や建築士、不動産鑑定士、土地家屋調査士、税理士、弁護士、不動産コンサルタント、ファイナンシャルプランナーなど専門家のネットワークを繋ぐことを目的に、株式会社資産活用倶楽部京都を平成11年8月に設立しました。

株式会社を設立するにあたり、地家主さんや専門家50人に1株ずつ出資してもらい、これを資本金としました。この会社は利益を上げることよりも、株主である地家主さんのために運営する株式会社といえます。地家主さ

んが同じく株主である各種専門家に相談するのは原則無料です。

資本金の運用で利益を出すだけでなく、事業に伴う専門家の職能に関する報酬の10%を資産活用倶楽部京都の利益として納入してもらいます。昨年の8月に株主総会を行いました。僅かではありますが株主さんに配当を出すこともできました。

#### 特殊な株式会社と思いますが、継続できる理由は何でしょうか。

株式会社資産活用倶楽部京都は、各分野の専門家がいる総合病院のようなものです。多くの専門家による資産の総合診断をはじめ、予防・治療、そして手術まで行います。そして専門家グループは、地家主さんの資産のホームドクターとして、支援してくれるのです。

これは、地家主さんにとって資産を保持・活用する際の不安の除去と共に、沢山の「仲間」ができる心強さを得ることになり、そしてそれぞれの専門家にとってはビジネスチャンスになっています。

今日ではより多くの地家主さんと一緒に勉強するために、株主ではなく会員として多くの方を集め「京都会」として活動も展開しています。内容は、毎月1回ずつあるセミナーとイベントです。セミナーでは固定資産税や相続税に関する勉強会や定期借地事例見学会などの資産保持・活用に関する実務的な内容を中心に行っています。イベントでは新築鑑賞会やカクテルパーティー、料理教室など皆さんが楽しく参加できるものを行っています。最近では会員の方からの「次はこんなことをしてよ」という提案も増えています。このようなセミナーやイベントには、会員の方の家族も多数参加され、まさに家族ぐるみのつきあいが展開されています。



資産活用倶楽部の活動の様子

タイムリーな話題についてみんなと共有できるだけでなく、お互いの信頼関係に依拠しており、そして何より参加して楽しいということが、会を継続させているだけでなく、発展させることに繋がっていると思います。



創立総会の様子

#### 今後の展開を教えてください。

最近ではインテリアコーディネーターの専門家に加わるなど、より地家主さんのニーズにより、きめ細かに応える体制が整いつつあります。

今後も、会員さん一人一人が安心して心豊かな生活を送れるような体制を充実させていくと共に、様々な提案をしていきたいと思えます。というのは、多くの地家主さんは資産である土地を活用する際には「いいもの・いいまちを創りたい」という思いを強く持っておられます。このため、ハード面の豊かさだけでなく、そこでの人の暮らし、なりわい等のソフト面の豊かさを実現するためのプロセスに関する提案も行っていきたいと思えます。これはまさに「まちづくり」の発想ですし、不動産の評価基準にいかにか豊かな住環境かという「環境」という視点が付加されるようになってきている今日、豊かな生活の実現、まちづくりは結果として不動産の価値を維持・向上させることにもなるのです。

#### お問い合わせ

株式会社資産活用倶楽部 京都  
 〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町6  
 株式会社フラットエージェンシー内  
 TEL : 075-721-0505  
 FAX : 075-721-0193

## 《センター解説アワー》

### 「エコマネー」(地域通貨)

「エコマネー」とは、国が発行する円やドルなどの「法定通貨」とは違い、地域住民が独自に発行し、物やサービスを地域内で循環させることによって、地域経済やコミュニティの活性化を促進することを目的としています。また、地域内での相互扶助や地域資源を生かしたコミュニティビジネス(13号で解説)の促進にもつながることが期待されます。

お金で買えない人と人の顔の見える暖かなつながりが広がることから、エコマネーネットワーク代表者の加藤敏春氏は「暖かいお金」と呼んでいます。

世界各国で試みられており、その数は約2,500、国内でも数十地域で取り組んでいると言われています。

「エコマネー」は地域住民が運営団体を作るところから始まります。

通貨名として「おうみ」(草津市)やZUKA(宝

塚市)など地域らしいものが使われます。平成12年夏には、京都でも仁(崇仁地域)という通貨が試行されました。

形式としては、通貨型や通帳型、小切手型等があり、これもそれぞれ地域毎に工夫を凝らしています。

地域住民は、運営団体に「自分がしてあげられること」「してもらいたいこと」を登録します。内容は、買い物や、犬の散歩等のお手伝いから、話し相手、パソコンの操作や、料理等の指導、演奏等の提供など、地域住民の持つ特技や趣味、関心領域等に応じて様々なものとなります。

登録内容は運営団体により「メニュー表」に整理され、地域住民に配られます。

サービスを受けたい人は、提供してくれる人に電話等で依頼し、サービスを受けた後、感謝の気持ち

を込めエコマネーをサービスの提供者に渡します。支払う額は、所要時間やサービスの内容等に応じて決められています。

運営団体はエコマネー発行時に受け取った資金を運営費や地域のまちづくりに活用します。

手渡される度に、エコマネーには、受けたサービス内容と関係した人の記録が記載されます。それらを見ることにより、運営団体は課題や不足しているもの等地域の実態を知り、まちづくりに役立てることとなります。

そういったエコマネーを通じて、様々な新たな人のつながりが広がり、そのつながりの中から「人」「もの」「こと」の地域資源が生かされ、地域の価値を高める様々な取組が広がっていくことが大いに期待されます。

# 私と京都



## 京都・学び始め

京都を学んでいく過程を追ってみようと思う。京都が自分にとってどうあるのか振り返ったことはなかったから、京都在住50年を記念して思い出してみたい。父親が家族4人で移り住んだのは、北大路室町下ルであった。中学校へは市電で通学した。千本北大路から千本通りを下がる系統に40分近く乗った。ポギ一車走り出した時期である。満員で乗れないときもあったように記憶する。いつもどこかの区間でレールの交換作業をやっていた。敷石をはがして新しいレールを敷くのだが、いつの頃からか新しいレールにはならず、古いレールのまま床盤を修正して、アスファルトを流し込んで終わり、という工事になったような印象がある。高等学校も北大路通りの市電に乗った。この方は待ち時間を入れても10分ほどだった。短い距離だったから同級生の中には歩いて通学しているものも多かった。時々一緒に歩いて帰ると、面白いルートを探して通学しているのが分かった。大徳寺の中の抜け道である。石垣等のいろんな所が壊れていて、人が通れるようになっていた。しかし次第に修理がされて秘密のルートが無くなっていった。高等学校までは、鴨川の西、今出川の北側が行動の範囲だった。今出川大宮下がったところに、同級生の家があってよく遊びに行った。糸間屋さんで西陣の町家だった。夜遅くまでその家にと、帰るときには住み込みの若い従業員が寝ている横をそっと通った記憶がある。人の住み方がすごいなと思ったりもした。大学から松ヶ崎へ通いだして、そのまま今に至って

京都工芸繊維大学工芸学部教授  
河邊 聡

いる。学生時代の松ヶ崎はほとんど印象が無い。大学に助手で採用されて与えられた研究室が比叡山のように見える3階の室だった。大文字山から比叡山にかけての山並みが、すそまで良く見えていて、秋口の夕刻30分ほどの間、紅から紫に色が落ちるのを楽しんだ。人工林の桧や杉の森は、その時いつも黒くて、色が変わるのは広葉樹だと誰かが教えてくれた。いつの頃からか松ヶ崎の集落に興味を持つようになって学生ともよく歩きにいった。このあたりは妙法の山から南下がりの斜面地なのに、山に向かって流れている水路を見つけて驚いたりもした。高野川上流から延々と引いてきた水にまつわる話を読んで、松ヶ崎の水路の細かさに感心した。つい最近まで「水役」が出した高札が見られた。先祖代々大切にしている水だから粗末にしないように、という注意と併せて勝手に利用しないように、と書いてあったように記憶している。管理された水なのである。松ヶ崎は里山の風情を今に残している。住宅地中での営農指定地が多くある。それも近年、連続していた農地が学生アパートで分断されてきた。建物が建つと景色が悪くなる状態は、建築設計にかかわるものには意気消沈をもたらす。建築行為は景観破壊なのだろうかと思ってしまう。

松ヶ崎とか北大路通りとか、京都の周辺部、それも北部に限ったところから京都を眺めていた話で終わってしまった。いまも変わらずに里山的、郊外型、周縁的見方を深層として持って、町なかを歩いているかもしれない。

## センター語録

新世紀がスタートして早くも2か月余りが過ぎましたが、この歴史の節目は、私自身にとっても人生の折り返し地点?であり、改めて身が引き締まる思いがします。さて、この21世紀に思いを巡らせてと、前世紀では科学技術の発達で人類にさまざまな幸、不幸をもたらしたのに対して、今世紀は一人一人の人権、生命がいかに尊重されるかということが大きな命題となっています。各地域で進められるまちづくりにおいても、地域の活性化に向け、地域資源を生かし、地域の魅力を高める活動が展開されていますが、そこにはやはり人間としてどう生きるか、いかに長く安心して地域に住み続けられるかというのが根底にあると思います。特に2025年には65歳以上が3人に1人の割合になると予測される京都市においては、地域住民やNPO、ボランティア、行政などが連携し、自助・共助・公助で豊かな高齢化社会を地域単位で実現していくことが求められるのではないのでしょうか。その中で景観・まちづくりセンターがどこまで役割を果たしていけるのか。常に時代の変化には適切に応えられる組織でありたいものです。

スタートをきり、今まさに加速するセンターには決して折り返し地点などないことを信じて、センターの将来像にさまざまな思いを抱いているところです。

(景観・まちづくりセンター事務局 N.Y)



## センターからのお知らせ

### 賛助会員の募集 (平成13年度分)

京都のまちづくりに貢献したい! センターの活動を応援したい! そんなあなたの熱意をお待ちしています。

- [特典] ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

### [年度会費]

個人1口: 5千円 団体1口: 5万円

### まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

### 京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>



センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

### (財)京都市景観・まちづくりセンター 京まち工房 案内



〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町 452 (元龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031  
(支援・参加・入づくり)

FAX 075-212-4047  
e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等  
月～金(祝日を除く)9:00～17:00  
来所される場合はなるべく事前にお電話ください。  
なお、駐車場はありませんので地下鉄をご利用ください。